

Glocal Tenri



11

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.16 No.11 November 2015

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
おもてなし
／深谷忠一..... 1
 - ・ 天理教教理史断章 (98)
近愛文書⑩ — 「おさしづ」割書考 2
／安井幹夫..... 2
 - ・ 『教祖伝』探究 (17)
おはる様お直し
／深谷忠一..... 3
 - ・ 「おふでさき」天理言語教学試論～「こと」
的世界観への未来像～ (19)
第2章 本居宣長『古事記伝』⑦
／井上昭夫..... 4
 - ・ 「元初まりの話」に登場する動物たち (8)
「み」について③
／佐藤孝則..... 5
 - ・ 「おふでさき」の標石的用法 (3)
和歌体について
／深谷耕治..... 6
 - ・ 「おさしづ」語句の探求 (10)
第1巻において「道」が用いられる場面
／澤井治郎..... 7
 - ・ 天理参考館から (3)
学校教育と博物館の関わり
／幡鎌真理..... 8
 - ・ 新宗教のブラジル伝道 (31)
救済の多様性 天理教①
／山田政信..... 9
 - ・ 地域福祉を拓く — 新たな寄付文化の創
造— (11)
「天理び〜すべ〜すプロジェクト」の取り
組み④
／渡辺一城..... 10
 - ・ 遺跡からのメッセージ (5)
イギリス滞在記① 大英博物館とイギ
リスの近代
／桑原久男..... 11
 - ・ 現代宗教と女性 (6)
「カッコウの卵」伝統
／金子珠理..... 12
 - ・ 2015 年度公開教学講座要旨 (1)
天理教と現代社会の生死観：誕生
／深谷忠一..... 13
 - ・ English Summary..... 14
 - ・ おやさと研究所ニュース..... 15
- 「興福寺佛教文化講座」での連続講演(幡鎌一弘)／第12回日本オオサンショウウオの会宇陀大会に参加(佐藤孝則)／『グローカル天理』合本のご案内／諸井慶徳博士御誕生100年記念シンポジウムのご案内／平成27年度公開教学講座のご案内

巻頭言

おもてなし

おやさと研究所長 深谷忠一 Chuichi Fukaya

先月号で紹介したデービッド・アトキンソンは、日本の“おもてなし”について、以下のように言っています。

訪日観光客が日本人の礼儀正しさや個人的な親切に感動しているのも事実だが、一方、ホテル・旅館やレストラン等は、一方的に日本のやり方・サービスを押し付けると酷評されていて、日本がホスピタリティにあふれる国だと思っている人は少ない。

日本の観光業のホームページに、“素晴らしい日本式のおもてなしを外国人に味わってもらえよ”とあたりすぎるが、“郷に入れば郷に従え”の発想は、客側や他所からやってくる人が自ら進んで心得ること。ホスト側から強制されるべきものではない。どの国でも自国のホスピタリティには自信があるわけで、日本の“おもてなし”は特別だと押し付けられても、皆が喜ぶわけではない。

“自分たちのルールを変えるつもりはない。でも、ルールの異なる人々にも評価され、受け入れてもらいたい”これは、かなり都合のよい、上から目線のロジックである。

また、彼は、相手に合わずホスピタリティの例として、イギリス観光庁が作成したホテル従業員用のマニュアルに、以下のようなことが書かれていることを紹介しています。

“カナダからの訪問客をアメリカ人と呼んではいけない”

“インド人は愛想はいいが、気が変わりやすい”

“ロシア人は長身なので、天井の高い部屋を用意すべき”

“ドイツ人とオーストリア人は総じて

遠慮がなく要求が厳しいので、無礼で攻撃的に見えることもある。苦情には迅速に対応すること”

“香港の迷信深い人には、歴史ある建物や四柱式のベッドで眠るのは幽霊が出そうだと嫌うので、勧めてはいけない”

“面識のないフランス人にほほ笑みかけたり、目を合わせたりしてはいけない”

“ベルギー人には、同国の複雑な政治や言語圏の話をしようとしてはいけない”

“日本人の客にははっきりノーと言わず、もっと感じのいい言い方を考えなければならない”

(『新観光立国論』より要約。東洋経済新報社、2015年)

さて、“おぢばがえり”は観光ではありませんが、教祖が、「この家へやって来る者は、喜ばさずには一人もかえされん」と仰せられているように、世界各地からの帰参者の満足度が問われる点では同じです。そして、その満足度向上のためには、アメリカ、カナダ、メキシコ、コロンビア、ペルー、ブラジル、パラグアイ、アルゼンチン、イギリス、フランス、ドイツ、オランダ、イタリア、コンゴ、ケニア、ウガンダ、インド、ネパール、シンガポール、インドネシア、ミャンマー、カンボジア、タイ、フィリピン、香港、台湾、韓国、ロシア、ウクライナ等々の帰参者の国情や生活環境の違いはもとより、一人ひとりの“おぢばがえり”が、どういう背景、心情・決意によるものかを心得る。そして、その時々々の心理状態や体調にも十分気配りをして、“おもてなし”をすることが大切なのです。そういう努力のもとに、誰もが感動できる“おぢばがえり”の輪が広がれば、必ず“訪日外国人の大半がおぢばがえりの人”と言える日がくるだろうと思う次第です。